

京極読書新聞 <第69号>

発行日 平成27年 7月1日(水)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー 2015

第2回

もうすぐ夏休み。 <編集部>

小出 沙羅さん(1年) 「止まったままの時計」
藤波 愛月さん(2年) 「武器より一冊の本をください」



小出 沙羅さん
「止まったままの時計」
今井福子／作
(文研出版, 2005)

藤波 愛月さん
「武器より一冊の本をください」
ヴィヴィアナ・マツァ／著
(金の星社, 2013)

——小出さんはどうしてこの本で感想文を書こうと思ったのですか？

小出 「止まったままの時計」という題名が気になったからです。本を読むと、「止まったままの時計」とは、主人公・小田切翔のひいおばあちゃん・武田アサさんの太平洋戦争の時代で止まってしまった心のことなのですが、戦争から60年（この本が出版されたのは2005年）も経った現在でも戦争の記憶に苦しめられている人たちがいることに驚きました。

——戦争で二人の子どもを失ったアサさん。認知症もかなりひどくなってきたアサさんなんですが、ひよんなことから、翔を戦争で死んだ「ツヨシ」と勘違いする。翔の友だち・帆乃香（ほのか）ちゃんを娘の「サナエ」と勘違いする。

小出 翔と帆乃香がアサさんの前で「ツヨシ」と「サナエ」を演じることで、アサさんの「止まった時計」が再び動き出しはじめるところが感動的でした。

——十年前に読んだ時は、そういうアサさんと翔と帆乃香の話だと思っていたんだけど、今回のインタビューのためにもう一度読みかえしたら、そのアサさんの話と平行して、自殺してしまった翔の親友「タイム」のことがかなり細かく描かれていたのには驚きました。「タイム」の自殺理由が最後まで明かされない小説の造りも気になりました。

——藤波さんはどうして「マララ・ユスフザイ」さんの本を選んだんですか？

藤波 去年のノーベル賞は青色LEDの発明・実用化に成功した三人の日本人が受賞したことで話題になりましたが、同じくらい興味を持ったのが、ノーベル平和賞を受賞したのが17歳の女の子だったことです。たまたま湧学館で、表紙にマララさんの写真が載っている本があったので読んでみました。

——この本を読むと、ずいぶん難しい時代に私たちは入ったんだな…と思いましたね。国と国が戦争していた時には「誰が敵か」はある程度明瞭だったけれど、もう「テロとの戦い」の時代になると、何が正義で、何が善なのか、その境界すら不透明になってくる。タリバンにとっての「敵」が17歳の少女であるなんて、未だかつてなかった戦争の形です。

藤波 だからこそなんですが、マララさんの「わたしは誰も敵だとは思っていません。わたしを撃ったタリバン兵さえ憎んでいません」という言葉には、この「テロとの戦い」の時代に向けたメッセージがあると感じます。

——そうですね。「止まったままの時計」のアサさんにも感じるんだけど、なにか、母親だったり、娘だったり、女学生だったりという「女性」の視点から見た戦争というか。

藤波 マララさんは次のように続けます。「タリバンやすべてのテロリスト、過激派の子どもたちにも教育を受けてほしい」と。私はこの言葉に感動しました。

——戦争をこの世からなくすための、大事なことが語られていますね。最後に、最近読んでおもしろかった本とか映画とかあったら教えてください。

小出・藤波 「ビリギャル」です！

京中生に
インタビュー
2015
第2回



インタビューで取り上げられた本は湧学館で読むことができます。「京極読書新聞」とあわせてお楽しみください。

西村 由布さん(2年) 「きみの友だち」 分銅 紘汰くん(3年) 「非・バランス」

——「非・バランス」、すごくよかったです。この本の存在に気づかせてくれた分銅くんに感謝です。

分銅 湧学館で本を探していた時に、パッと目に入ってきたのがこの本でした。

——なにかが呼び合ったんでしょうかね。

分銅 最初は、この本は短くて読みやすそうだなと思って読みはじめたのですが、読んでいる内に、自分が思っていたよりも全然内容が深かったことに驚きました。

——作者の魚住直子さんも、おそらく、西村さんのような思春期の女の子が読むことは想定していても、まさか中学2年の男子生徒がここまで「非・バランス」を読み込んでいることには驚くんじゃないかなあ。とても得がたい感受性だと思いました。

——今回、お二人でインタビューを考えたのは、「きみの友だち」と「非・バラン

ス」にはある重要な共通項があったからです。つまり、教室の中で孤独であること。そして、孤独を怖れてはいないこと。

西村 「きみの友だち」の主人公・恵美は、小学四年生の時の交通事故が原因で一生足が不自由になってしまいます。恵美の唯一の親友・由香ちゃんは生まれつき腎臓が悪く大人になるまで生きられるかどうか分からない。そんな二人の話です。

——恵美の、「みんな」に対する考え方がおもしろかったです。

西村 「みんな仲良くなんていうのはない。みんながみんなのうちには本当の友だちにはなれない」という言葉ですね。そして本当に、恵美は「みんな」ではなく「由香ちゃん」とのつながりを選んで行きます。この恵美の心には共感するものがいっぱいありました。



分銅 紘汰くん
「非・バランス」
魚住直子／著
(講談社, 2006)

西村 由布さん
「きみの友だち」
重松清／著
(新潮社, 2005)

3ページ目からの続きです

——それもあって、由香ちゃんとお別れの場面は切ない。

西村 病院で一週間以上もの昏睡をつづける由香ちゃんを前にして、恵美は、初めて由香ちゃんの家に行き、最初で最後の由香ちゃんの誕生日パーティーをした日のことを突然思い出すのですが、私にはここがこの小説の圧巻でした。

——「非・バランス」の圧巻は、やはり、サトウユカリの家へ独りで行く場面でしょうか。

分銅 僕がこの本を読んで共感できるところは、いじめられる悲しみやつらさがきちんと描かれているところです。ですから、ラスト近くの、サラさんがつくってくれた緑のコートを着て、小学校の時に私をいじめていたサトウユカリの前に立ち、自分がずっと持っていた思いの丈を叫ぶ場面には感動しました。「友達を作らない」と心に決めていたはずの主人公が、サラさんという存在に出会うことによって、いろいろな人に心を開いて変わっていくところが この本のすばらしさです。

——最近読んだ本で、おもしろい本はありましたか？

西村 「ようこそ、わが家へ」という本がおもしろかったです。

分銅 僕はファンタジー系の本をよく読んでいます。

——ファンタジーか。そういえば、ラジオでたまたま上橋菜穂子さんのインタビューを聞いて興味を持って、いつか「獣の奏者」とか読まなくちゃと思っていたんだけど、「鹿の王」が本屋大賞を取ったとたん、図書館中の上橋さんの本がすべて貸出中になってしまいました。今、湧学館に一冊も残ってません。

西村 「鹿の王」、読みました。お母さんが買ってきた上巻が家にあっただけで読みはじめたのですが、あまりにおもしろくて待ちきれなくなって、下巻は自分で買ってしまいました。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

京中生に
インタビュー
2015
第2回

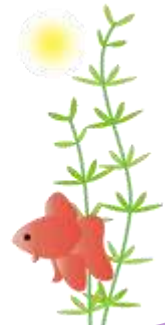


夏休みは湧学館へ！

* 臨時開館(10:00-18:00) *
7/27(月)、8/3(月)、8/10(月)

本の予約・リクエストも
お待ちしております

* 図書10冊貸出 *
7/24(金)～8/18(火)



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

